香川大学教育学部 附属教育実践総合センターニュース

No. 39　　平成 26 年 3 月 31 日発行

目　次

特集　第 14 回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて　1-2
研究発表グループ報告　2-4
平成 25 年度 初等教育研究発表会報告　5
第 97 回 附属坂出小学校教育研究発表会報告　6
第 58 回 附属幼稚園研究発表会報告　7
第 17 回 附属特別支援学校教育研究発表会報告　8
平成 25 年度 センター公開講演会報告　9
第 2 期教育実践集中講座 実践報告　10
フレンドシップ事業 実施報告　10
センター活動報告・寄贈図書　11
センターからのおしらせ　12
教育実践総合研究第 29 号 原稿募集　12

特 集　第 14 回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて

【研究集会テーマ】**教員養成の充実に向けた学部改革について**
～「ミッションの再定義」と学部改革の方向について～

副学部長　毛利 猛

梅の香り漂う平成 26 年２月 27 日(木)に、第 14 回学部・附属学校園教員合同研究集会が教育学部 611・411・412・413・422・423 講義室・教授法演習室を会場に総勢 186 名（学部 80 名、附属学校園 106 名）の参加を得て、盛大に開催されました。

山神眞一学部長からは、今求められているのは教員養成の充実に向けた学部と附属の連携した取り組みであり、合同研究集会において学部改革に関する共通認識を深めることの意義は大きいことについて述べられました。

本研究集会の総合司会は実地教育委員長の岡田知也先生がされ、全体討論のコーディネーター役は私(副学部長　毛利)が務めました。

全体討論においては、まず学部長から学部・研究科改革の基本的な考え方と改革の概要について説明がありました。続いて、櫻井佳樹先生から教員養成のコース編成・新カリキュラムについて、加野芳正先生から教職大学院の設置を見通した大学院改革について、七條正典先生から実地教育・教職支援を中心としたセンター改革について提案がありました。教職大学院（高度教職実践専攻）の特色と担当、あるいは初等教員における教科指導力をめぐって有意義な意見交換ができました。最後に、附属高松中学校の末竹路弘副校長から、教員養成の充実に向けた学部改革に、附属学校園の教員として協力していくという力強い言葉で全体会を締めくくることができました。

学部・研究科の改革案は、まず、企画委員会とその下に置かれている４つのワーキングで原案を作成し、さらに教授会に上げて議論しています。全体討論で提案していただいた櫻井先生、加野先生、七條先生は、各ワーキングのチーフです。全体会において、附属学校園の先生方に学部・研究科改革について説明できる機会がもてたことは大変よかったと思います。

後半の分科会（個別発表）では、11 題の共同研究プロジェクトの成果発表がありました。今回は、６つの教室を使って前半 17:45～18:15 または後半 18:20～18:50 のいずれかで 30 分間のプレゼン発表をするという形式で行いましたが、いずれも充実した発表内容であり、学部教員と附属学校園教員相互の活発な意見交換がなされました。

その後、行われた懇親会にも 100 名を超える参加者があり、とても和やかで楽しい親睦のひとときでした。

研究発表グループ報告

小学校・中学校における読むこと・書くことの習得が困難な児童・生徒に対する学習支援の方法についての研究 －単元を貫く言語活動の工夫－

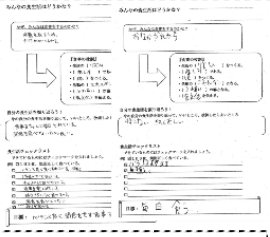
佐藤明宏、附属特別支援、附属高松小・中、附属坂出小・中

読むこと・書くことの学習指導が困難な児童・生徒は、「今、自分が取り組んでいることは、何の役に立つのか。そのことにどう繋がっていくのか。」という学習の見通しを持てないと学習意欲がわかない。目的が見えない細切れの練習学習は、そういう児童・生徒に苦痛をしいることになりかねない。そこで、児童・生徒の願いに貫かれた自発的な単元学習を展開することが、特に特別支援を必要とする児童・生徒にとって重要だと考え、この研究に取り組んだ。しかし、児童・生徒が主体的に取り組んだとしても、その活動が楽しいだけで児童・生徒の学力の向上に結びつかなければ意味がない。そこでこの自発性と学力とのバランスを考えながら、われわれ様々な地域の様々な校種の教員が連携して、子どもの願いに貫かれた楽しくてかつ学力を育成できる言語活動単元を開発・運用することで、教師主導から児童生徒主体の単元設定と授業展開のあり方についての改善を図った。

食育の充実に重点を置いた中学校技術・家庭科の授業開発

加藤みゆき、附属坂出中

食育の充実に重点を置いた授業開発について考えることを行った。食育に関しては多くの研究がなされているが、今回は生徒を取り巻く食生活の現状を認識させてその上において食生活の大切さを考えさせることを目的に授業開発を行った。その結果、生徒自身の家庭生活において、家族と一緒に考えるという視点を組み入れることにより、食の大切さを考えさせることができた。

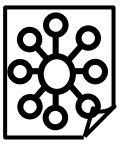


中学校国語科における「思考ツール」を使った読みの授業の実践的研究

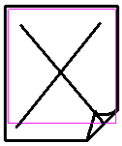
山本茂喜、附属坂出中

私(山本)と附属坂出中学校の川田・大西両教諭との共同研究は、ビジュアル・ツールを活用した国語科学習についてのもので、ここ数年来継続して行うことが出来た。その成果をもとに、本年３月、東洋館出版社より研究成果（『魔法の「ストーリーマップ」で国語の授業づくり』）を公刊することができた。深く感謝する次第である。今年度はその発展として、思考ツールとしてのベン図やイメージマップ、KWL チャートなどを用いた実践を行い、分析・考察を行った。

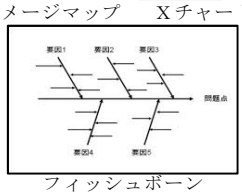
当日は多くのご意見・ご質問をいただくことができた。来年度以降もさらに共同研究を深化させていきたいと思っている。



イメージマップ



Ｘチャート

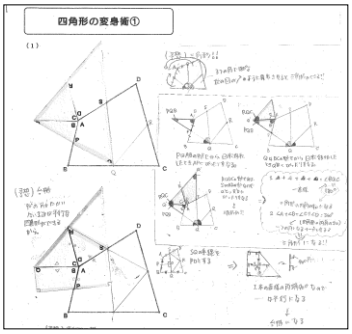


フィッシュボーン

「数学を学ぶ意味」を実感させるための教師のかかわりのあり方
－レポート学習や振り返りカードの活用を通して－

風間喜美江、附属坂出中

数学を学ぶ意味に気づくことは、数学を学び続ける意欲の醸成に関わっていると考える。本研究は、課題に対する当事者性を高め、考えを深めたり、振り返ったりするレポート学習を取り入れ、その有効性を探るものである。指導の重点は、「生徒が探究の場となる課題を開発し、クラス全員が共通に取り組む場を工夫する」「クラス討議、グループ討議後に、各生徒がそれを『拡張・発展させた課題』をつくり探究するレポート学習」を中心に取り組んだ。教師は個に応じた探究の支援などを適切な指導を設計し、実施した。生徒の積極的で質の高い活動がみられた。



右図：作成した生徒のレポート例「はとめ返しの課題」

音楽科における評価の開発研究

岡田知也、附属高松小

「音楽の授業の評価は難しい」という声を聞くことがあります。本研究は、そのような声に少しでもお応えできるように、小学校の音楽科において、児童が音楽に対する見方や考え方を育んでいけるような新たな評価の観点を設定し、授業における評価と指導方法を改善することを目的としています。

本年度は、これまで収集した授業実践における評価と指導方法のデータをもとにして、児童の実態に即し、創造的思考を促す楽曲の分析と録音機材を活用した授業の実施、及び新たな評価の観点や評価資料の分析を行いました。

今後は、本年度の成果をもとに、新たな評価の観点の開発と授業実践を通した評価の具体について明らかにしていきたいと考えています。

小学校国語科における思考ツールの活用についての実践的研究

山本茂喜、附属高松小

私(山本)はこれまで、ビジュアル・ツールを活用した国語科学習について、附属高松小学校の山村勝哉教諭と共同研究を行う機会を継続していただいてきた。その成果をもとに、本年３月、東洋館出版社より研究成果（『魔法の「ストーリーマップ」で国語の授業づくり』）を公刊することができた。深く感謝する次第である。今年度はその発展として、新たにフィッシュボーンやマンダラマップを用いた実践を開発、附属高松小学校の研究大会で公開し、分析・考察を行った。

研究集会当日は貴重なご意見・ご質問をいただくことができた。来年度以降もさらに共同研究を深化させていきたいと思っている。

3D プリンタで作成された教材の授業での利用

黒田　勉、附属高松中、附属坂出中

本研究では、積層型 3D プリンタを用いた教材開発を行い、設計・製図の時に必要な「複雑な形状」を持ったプロトタイプ教材を作成した。それらの教材を、授業に使用し、生徒による評価も行っている。

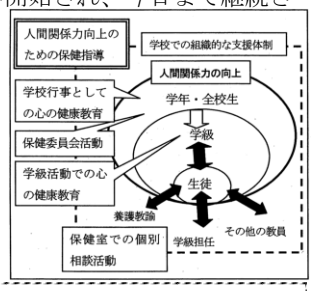
技術科の単元である「ものづくりに関する技術」、「情報に関する技術」での授業の一端として、作成した教材を、キャビネット図、等角図で描く練習を行った。CAD・CAM は、中学校技術科で必修の内容ではないが、最近の「ものづくり」現場では必須の項目であるので、学校の中で職業体験ができるようになれば、生徒のキャリア意識の形成にも用いることができると考えている。

多年にわたるピア・サポート実践の成果と今後の展望

宮前義和、附属高松中

予防・開発的な教育相談として、構成的グループエンカウンターや集団社会的スキル訓練、ピア・サポート等がある。ピア・サポートは、広義には「支援を受ける側と、年齢や社会的な条件が似通っている者(ピア・サポーター)による、社会的支援(ソーシャル・サポート)」と定義されている(戸田,2001)。

附属高松中学校では、2002 年度よりピア・サポート活動が開始され、今日まで継続されている。12 年間に及ぶ実践はそれ自体でも特筆すべきことだが、短期間の研究では得ることのできない知見が含まれている。そこで、本研究では、公刊されている論文の展望及び養護教諭への聴き取りを通じて、実践の成果と課題を明らかにするとともに、今後の展望について検討した。発表では、研究をまとめていて気づかなかった点等をご指摘いただいた。



(図の出典：松岡久美子(2013).予防的な心の健康教育の在り方－良好な人間関係を築くための保健指導を通して－　香川大学教育学部附属高松中学校研究報告，4(1)，99-104.)

「遊びの質」から考える保育づくりに関する研究

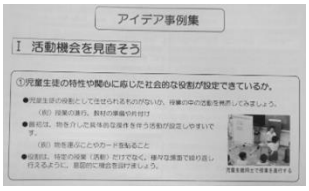
松本博雄、松井剛太、片岡元子、附属幼稚園

幼児にとって発達の基礎を培う重要な学習であると言われている「遊び」。しかし、その重要性を外部の人に説明することは大変難しいものがある。共同研究では、それぞれが「『遊びの質』についてどう考えるか」からスタートし、実践とつないで議論を深めていった。今回の研究集会では、「遊びの質の高まり」を、保育者の計画的な援助から生まれる「第一の学び」と保育者の意図と異なる部分で子どもたちが生み出していく「第二の学び」との間のダイナミックな展開プロセスに見出せることを提案した。今後も、記録と議論を重ね、子どもの「思わぬ姿」を引き出しうる保育づくりやそのための体制づくりについて研究を進めていきたいと考えている。

知的障害特別支援学校における主体的な社会参加をめざした「授業づくり」についての提案

武藏博文、附属特別支援

本校では、主体的な社会参加の実現をめざし、「児童生徒一人一人の参加の高い授業づくり」について継続的に研究を行っている。本年度は、既に作成している「授業改善の手順とポイント」(教員が共通の視点をもって授業改善ができるように、手順や観点を整理した表)をより使いやすいものに更新した。また、各項目について、より分かりやすく具体的に伝えるために、「アイデア事例集」を作成した。 これらの提案は、特別支援学校だけでなく、小・中学校における参加の高い授業づくりにも参考になるものではないかと考える。今後、広く活用できる「授業づくり」の方法を提案していきたい。



中学校教育における探求型授業の開発研究

三宅岳史、附属高松中

(1) 生徒が問題を発見し、自分たちで明確な形に設定することは、実は問題を解くことよりも難しいが、(2)できあがった問題を教員が与えてしまうと課題探求にならない――このような課題探求型学習に内在するジレンマをうまく切り抜けるような探求の枠組みをいくつか開発したいというのが本プロジェクト研究の目的です。研究報告では、未来志向科の単元「四国遍路を世界遺産に」での実践例をもとに、知識注入に偏りやすいという困難に対して、課題意識を高めるためのいくつかの工夫とその成果・課題を示しました。当日は、生徒のアンケートを中心に、実践例に関するご質問やご助言を多数いただきありがとうございました。

附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎「初等教育研究発表会」報告

香川大学教育学部 附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎

２月６、７日に開催した「初等教育研究発表会」には全国から多くの方々にご参会いただき、盛会裏のうちに終了することができました。学部の先生方には、ご指導・ご助言をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。また、学生の皆さんにも協力していただきました。ありがとうございました。

【附属高松小学校】

本校は、本年度より文部科学省研究開発学校の指定を受け、新しいテーマを「分かち合い、共に未来を創造する子どもの育成」とし、研究を進めてまいりました。「分かち合い」とは、学習の主体としての子どもが、自らをメタ認知しながら、共に生きていく他者と互いの見方・考え方を共感し、認め合うことであり、その過程で、共に学ぶ価値を実感することにつながります。つまり、なりたい自分を心に描き、自分にとっての問題を認識し、仲間と共に試行錯誤しながら積極的に問題を解決していこうとする中で自信をもち、主体的に「ひと・もの・こと」に働きかけることだといえます。また、テーマにある「未来」とは、これから訪れる時を意味するだけでなく、子どもたちが今現在の中でもつ自己の見方・考え方を様々な価値観をもつ人々との関わりによって、よりよくしていくことであり、夢や希望をもって自己の生き方・在り方を創造していくことと捉えることができます。

そして、そのような目指す子ども像に向け、育みたい資質・能力として以下の３つを設定しました。

○夢や憧れをもち、自律的に学び続ける力　　○「ひと・もの・こと」へ共感的・協同的に関わる力

○創造的に問題を解決し、価値を創造する力

仲間と共に豊かに問題解決する子どもの姿

更に、そこに向かうためのカリキュラムを「知を創造する過程における見方・考え方を育む教科学習」と「価値を創造する過程における生き方・在り方を育む新領域『創造活動』」の２領域から構想することとしました。また、２領域で３つの資質・能力を育むために、子どもたちが主体的に学ぶことができる授業の在り方を検討し、３つの授業づくりの「しかけ」(志向・共感や協同・価値)の重要さも確認できました。

さて、初等教育研究発表会では、このような新カリキュラムに基づき、これからの社会を生き抜く子どもたちに必要な資質・能力を考え、目指す子ども像に向かう授業づくりについて検討することによって、教員の教育観・指導観が変容し、子どもやその事実に対する謙虚さや、授業に対する誠実さを学ぶ契機となりました。今後も、子ども主体の研究実践を基盤にしながら、新しいカリキュラムの創造に取り組んでまいります。

【附属幼稚園高松園舎】

幼小交流「うごいてつたえてうれしいな！」

テーマ「能動性を発揮する保育環境の再考―遊びの中で心を動かせ表現する子ども―」のもと本園で実践してきた身体表現について“心を動かせる保育環境”を切り口に事例検討していきました。さらに、幼小交流活動についても“身体表現”を通して心を解放し、学びを深めていきました。研究会当日は、４・５歳児の保育および５歳児と１年生の幼小交流活動を公開しましたが、県内外から多数の参加者がありました。パネルディスカッションでは、子どもの表現の芽生えを見逃さず保育者の感性を磨くことの重要性について議論し、参会者からも活発な意見がよせられました。

附属高松小学校・附属幼稚園高松園舎では、教育の今日的課題を見据えつつ、明日の教育の在り方を実践的視点から検討し研究を続けますとともに、実践を通して提案していきたいと考えています。今後とも、ご助言・ご支援の程、よろしくお願いいたします。

第 97 回　附属坂出小学校 教育研究発表会報告

香川大学教育学部 附属坂出小学校

＜研究主題＞

「思考力」を育成するユニバーサルデザインの授業づくり（２年次）
－特別支援教育の考えを生かして、すべての子どもの思考活動を保障する－

１　研究主題について

どの子どもにも『思考力』を育てたい。昨年度のそんな思いを受け継ぎ、本年度も上記研究主題を掲げました。ここでは、学力の三要素である「学習意欲」「知識・技能」「思考力」の関係を明らかにするとともに、特別支援教育の考えを生かして「学習意欲」「知識・技能」に働きかけることで「思考力」の育成を図りました。また、子どもたちどうしの学び合いを重視し、関わり合う中で考えが広がり、深まっていくよう試みました。

２　研究発表会の概略

各教科、英語活動合わせて、２日間で 17 本の授業提案を行いました。参観された先生方からは「これは、今求められているものであるとともに、不易の授業づくりだ」というご感想をいただきました。

また、１日目の鼎談では、文部科学省、大学、本校の三つの立場からユニバーサルデザインの授業づくりについて語り合いました。さらに２日目のシンポジウムでは、文部科学省の先生方と共に、具体的な授業における思考力育成のポイントを、全体授業を基に明らかにしていきました。

【全体授業　第４学年 理科】

３　成果と今後の方向

「主要な働きかけ」と「補完的な働きかけ」の効果的なつながりを吟味しながら、授業の中で複数の働きかけを行うようにしたことで、子どもの多様な学びに対応することができました。また、有効となる働きかけの要件を見いだしたことも成果の一つです。

今後は、学びの各場面において、さまざまに反応する子どもたちをどのように受け止め、反応を組織していけばよいのか、より一層、学び合いに焦点をあてて研究を深めていきたいと考えています。

第 58 回　附属幼稚園研究発表会報告

研究主題　幼児教育の質を高める計画と実践の在り方を考えるⅡ
～主体性と協同性の視点から～

香川大学教育学部 附属幼稚園

１月 31 日、第 58 回附属幼稚園研究大会を開催しました。県内外から約 250 名の参会者をお招きし、盛会に終えることができました。

附属幼稚園では、質の高い保育を「一人ひとりの主体性や協同性が発揮できる生活」と捉え、それを目指して、保育のプロセスを大切にした計画や実践の在り方について研究を進めてきました。

≪日程・内容≫

9:00～10:50　公開保育

11:10～12:00　全体会
～開会式・研究経過報告～

13:00～14:10　分科会
協議テーマ
「この時期の主体性と協同性を
どう捉え、育んでいくか」

14:30～16:00　講演
聖徳大学大学院教授
（前文部科学省教科調査官）
篠原孝子先生
「主体性と協同性を育む保育」

公開保育の様子

独楽

糸引き独楽の特性を生かした遊び方を提供することで、いろいろな遊び方を試してみようとする意欲や態度が膨らむように。

鬼ごっこ
～だるまさんが転んだ～

子どもたちの柔軟な発想やイメージを大切にして遊ぶことで、異年齢児とも一緒に、楽しさを共有しながら思いきり楽しめるように。

サッカー

教師も仲間の一人として全力で遊び、個々のよさやチームプレーを認めていくことで、自己発揮につながったり友達関係がより深まっていくように。

１．研究内容

１）主体性と協同性を育む環境構成や保育の展開、教師のかかわりについて明らかにする。

「主体性と協同性を育む」という視点から保育実践を行い、事例を作成していきます。その事例検討を行うことにより、主体性と協同性を育む保育づくりの視点や教師のかかわりのポイントについて、結果主義的視点ではなく保育のプロセスに着目し、明らかにしていきました。

２）主体性と協同性が発揮できる生活をめざした指導計画の活用の仕方を提起する。

これまでに作成した指導計画を、１）の成果とつなぐことによって、保育の質の向上が図れる指導計画の活用の仕方を提起してきたいと考えました。なお、教師のこれまでの経験も、指導計画や保育実践で生かされていくことも考慮して検討しました。

２．研究の成果と課題

目の前の子どもが何に心を揺らし、一人ひとりがどのような育ちにあるのか、しっかりと捉えることが保育の出発点です。主体性と協同性を育んでいく教師の働きかけは多様にありますが「子どもの姿」「指導計画」「教師の願いやねらい」の３つがバランスよく噛み合った時に、子どもの主体性や協同性が本当の意味で発揮されたといえることが分かりました。

また、指導計画の活用の仕方については

・指導計画の１つ１つの言葉の意味を大切にし、それが十分経験できるような保育実践をしていく。
・保育は子ども理解から始まり、指導計画にかかれているこれまでの子どもの姿とこれからの子どもの姿を読み取ることで、今の子ども理解がより確かになる。
・指導計画は育ちを見取り、保育の展開を考えていく１つの仮説である。それを踏まえて、子どもの姿をベースに書き変えられていくものである。

ということが分かりました。しかし、これらは指導計画の活用の仕方の一部であると考えます。今後もそれぞれの教師の計画・実践の在り方を話し合い、そこでの学びを次の計画・実践に生かしていくことで、教師としての保育の視点の幅を広げ、質の向上を目指していきます。

第 17 回　附属特別支援学校 教育研究発表会報告

香川大学教育学部 附属特別支援学校

期日：平成 26 年２月８日（土）8：50～16：40

内容：全体提案、研究授業、ポスター発表、分科会、トークショー、講演

講演：「児童生徒の自立と社会参加を培う、わかって動ける授業づくり」
筑波大学大学院人間総合科学研究科教授　藤原義博 氏

参加者：全国の教育・福祉関係者　約 260 名

研究主題　子どもの主体的な社会参加をめざしてⅡ
―参加を高め、知識・技能を活用する力を育む授業づくり―

本校では、主体的な社会参加を実現するためには、授業の中で児童生徒の力を最大限に伸ばし、発揮できるようにすることが大切であると考えています。そこで、活動量が多く、児童生徒が自立的、主体的に活動する「児童生徒一人一人の参加が高い授業」をめざし、授業づくりに取り組みました。

まず、授業における「活動機会の見直し」を行い、さらに、その機会の中で児童生徒が自立的、主体的に動けるように「支援環境の見直し」（全体や個別への手掛かり、指導者の役割の工夫）を行いました。この見直しは、ＰＤＣＡのサイクルで行い、特に、Ｃの評価場面では、ビデオによる授業評価や KJ 法による改善案の検討を取り入れました。また、教員が共通の視点をもって授業改善ができるように、具体的な手順や観点を整理した「授業改善の手順とポイント」を作成し、授業実践で得られた成果を反映させて更新していきました。また、授業の参加を高めるための重要な視点を、①目的意識、②知識・技能の活用、③協同した学習と定め、改善の際、これらについての工夫を行いました。

研究の成果として、授業において活動の場が広がると同時に、自ら活動を始めたり児童生徒同士が活発にやり取りしたりするなどの、児童生徒が主体的に活動する姿が増えました。

さらに、「活動への目的意識を高めるための ICT 機器（テレビ、電子黒板、パソコン等）の活用」や「課題解決への意欲を喚起し主体的な活動へとつなげるための、既習事項を想起し確認したり思考を助けたりする支援ツール」、「児童生徒同士のやり取りを促進するための、活動の結果やプロセスについて情報共有するための支援環境」などについて有効な具体的支援が明らかになりました。

【生徒主体の授業（中学部：数学）】

今後、作成した「授業改善の手順とポイント」を活用した授業づくりの在り方の検討や、今回定めた授業への参加を高めるための重要な視点について深める研究を進めていきたいと考えています。

最後になりましたが、研究会に際しましての関係各位のご指導、ご協力に対して深く感謝申し上げます。

平成 25 年度 センター公開講演会報告

第１回　小学校外国語活動と中学校英語科の連携における課題 ／ 兼重 昇 先生

附属教育実践総合センターが主催する、本年度第１回公開講演会が、平成 25 年 10 月 19 日（土）14:00～16:40 に開催されました。当日は、小中学校教員、附属小教員、県教育センター、本学教員、院生・学生など、61 名の方が参加されました。

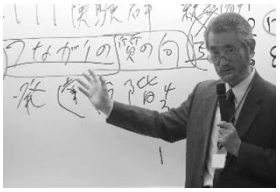
今回は、まず話題提供者として、直島町立直島小学校の濵中紀子先生に、英語活動について成果と課題を現場での映像や具体的な様子を提示しながら示しいただきました。そして、小中のカリキュラムの問題、教員研修の課題が兼重先生に投げかけられました。

それを受けて、広島大学准教授の兼重 昇先生から、現在の国や全国的な動向を踏まえて「小学校外国語活動と中学校英語科の連携における課題」と題し、ご講演をいただきました。まず、クイズや身近な大学生の実習の例を示されながら、外国語活動と英語の整理をされ、現在の教育現場における小学校英語の現状を解説されました。続いて濵中先生の課題と繋げながら、具体的な事例等を示しながら話されました。特に、①「思考」「文脈」「ことばの意味」を関係づけることの大切さ、②教材教具の有効活用として、自分なりのアレンジや身近な生活を生かすこと、③小中連携の段階的な取り組み（情報交換、交流、連携）の重要性を強調されました。最後に、外国語活動・英語教育という縦糸と学校教育全体としての横糸のバランスが大切であることを力説されました。参加者の方には、英語活動に関する環境整備や授業像を明確に描くことができました。また、それらを活用することのできる教員の養成・教員研修の在り方を考える上でも、重要なポイントについて、現場で活かせる話を伺うことができ有用な講演会となりました。（文責：植田和也）

第２回　道徳教育と私たちの社会生活 ／ 岩佐信道 先生

本年度第２回公開講演会が、平成 25 年 11 月 30 日（土）に日本道徳性発達実践学会との共催で開催されました。当日は、小中学校教員、附属学校教員、県教委、県教育センター、本学教員、院生・学生など、94 名の方が参加されました。

まず、道徳の学習指導要領の内容項目に関してクイズ形式で参加者が考える時間と場や生活の中で食生活や健康など、お世話になっているといえば具体的に何をイメージするのかを思い起こす時間が設けられるなど、参加者が理解しやすい工夫が多く見られました。道徳教育に関する大きな課題として、先生方の道徳に関する意識の問題が 20 年前も現在も変わらずに在るのではないかとデータを基に問題提起されました。また、教材について、映像教材「森が育むオショロコマ」を通して、具体的に道徳で活用するとしたらどのように考えるべきなのか、私たちの生活と関連させながら話されました。講演会全体を通して、道徳教育における発達として「つながりの質の向上」ということの重要性を力説されました。最後に「教師の学ぶ姿が教えることになっている」、「教師自身が人間として向上していかなければならないこと」を話されるなど、今後の道徳教育に関する重要なポイントについて話を伺うことができ有用な講演会となりました。（文責：植田和也）



第３回　学級経営と生徒指導 ／ 有村久春 先生

附属教育実践総合センター第３回公開講演会が、日本生徒指導学会四国地区研究会との共催により、平成 26 年 2 月 22 日（土）（13：30～16：20）に開催されました。公開講演会は、文部科学省「教員の資質能力向上に係る先導的取組支援事業」研究発表会でもありました。当日は、小学校・中学校・高校教員、教育委員会、教育センター、本学及び他大学教員、院生、学部生など、72 名の方が参加されました。

まず、研究発表では、香川県教育センター藤井浩史先生が、教員研修という観点から、教育学部と香川県教育センターが共同して作成した「達人が伝授！すぐに役立つ学級経営のコツ」について話されました。次に、教育学部毛利猛先生、植田和也先生が、教員養成という観点から、「学級経営論」という授業科目を紹介されました。最後に、高松市立高松第一小学校織田幸美先生が、集団社会的スキル訓練を活用した日頃の学級経営について発表されました。

研究発表の次に講演が行われました。演題は「学級経営と生徒指導」であり、講師は帝京科学大学有村久春先生でした。子どもの自己形成に資する学級経営をいかに行うのか、ロジャースのカウンセリング理論やエリクソンの発達課題を踏まえて語られました。（文責：宮前義和）

第２期（10～12 月）教育実践集中講座 実践報告

附属教育実践総合センター客員教授　　石川恭広・松井 保

なにがなんでも教師になる！　～教師になるあなたへの応援メッセージ～

第２期の集中講座では、教職実践演習の講義を活用しての講義・演習をはじめとして、道徳教育、生徒指導等を中心に、学校の教育活動全般にかかわる事柄について、演習や交流を大切にしながら学習を進めました。

［第６回］１０月３０日（水）　教職実践演習
・オリエンテーション＜授業の目的、求められる学習活動と評価　等＞（松井）
［第７回］１１月８日（金）　教職実践演習
・教育課題の探究＜戦後教育の流れ（学習指導要領の変遷）と社会・子ども・学校の状況 等＞（石川）
［第８回］１１月１５日（金）　教職実践演習
・授業づくり＜自己課題、指導案・板書計画の作成、模擬授業　等＞（松井）
［第９回］１１月２０日（水）　授業実践ケーススタディ
・「『指導技術』を視点にして」（松井）
・「分かる授業への道しるべ」（石川）
［第 10 回］１１月２２日（金）　教職実践演習
・学級経営＜学級経営案等の実際、学級びらき、子ども理解　等＞（石川）
［第 11 回］１２月９日（月）　道徳教育ケーススタディ
・「子どもの心を耕す授業とは」（石川）
［第 12 回］１２月１２日（木）　生徒指導ケーススタディ
・「望ましい人間関係づくりと生徒指導」（松井）
［第 13 回］１２月１６日（月）　道徳教育ケーススタディ
・「教育活動の『要』としての道徳教育」（松井）

教職実践演習では、教育学部の教員はもちろんのこと、受講生のいる経済学部、農学部、医学部の先生方が一緒になって指導に当たっておられることに、まず感銘を受けました。ルーブリックが提示されている班活動や、自己課題を明確にした上での演習に、真摯に取り組む受講生の姿が印象に残った時間でもありました。

道徳教育については、教科化の動きを押さえた上での位置付けと授業の在り方を探究することが必要であり、生徒指導は学校の教育活動を支える確固とした理念の確立と指導体制を構築することが求められています。

教員を目指す学生諸子が、今後も確かで力強い歩みを続けていくことを願う次第です。

平成 25 年度 フレンドシップ事業 実施報告

平成 25 年度「教育実践基礎演習（フレンドシップ事業）」は、41 名の受講生の参加を得て行われました。本事業は、学校教育の場である学校から離れた野外において、子どもたちとふれあう様々な活動体験を通して、子どもの気持ちや行動を理解し、教育実践のための実践的指導力の基礎を身に付けることを目的として実施しています。

本年度の主な活動は、以下のとおりです。

■**事前研修**：５月 15 日（水）
野外教育の意義、ならびに野外教育体験活動の日程・内容、
また参加及び引率に際しての諸注意等についての講話を聴く。

■**野外教育体験活動 指導者講習会**
：五色台少年自然センター：５月 25 日（土）～26 日（日）

■**野外教育体験活動**
Ａ 附属坂出小学校：屋島少年自然の家　　：７月２日（火）～３日（水）
Ｂ 高松市立栗林小学校：屋島少年自然の家　　：７月 12 日（金）～13 日（土）
（Ａ・Ｂいずれかを選択し、野外教育体験活動における児童への補助活動を行う。）

■**野外教育体験シンポジウム**：７月 24 日（水）
野外教育体験活動への参加を振り返り、成果と課題について協議し、助言を得る。

受講生に実施した質問紙調査によれば、本事業が「今後の進路の参考になったか」を問う設問に対して、全ての受講生が「参考になった」との回答を寄せています。また自由記述によれば、「子どもたちに「先生」と呼ばれるうれしさ、責任の重さを感じた。」「現場の教員の話がためになり、教員になりたいと改めて思った。」「１日目の反省で出てきた課題をどうすれば解決できるかをみんなで考え、学生のさまざまな考えに触れることができた。」などの意見が挙げられており、学生たちにとって本事業が、子どもたちとの接し方・声かけの仕方などに悩みながらも、受講生相互に意欲や課題意識を高め合いつつ、教職に対する熱意の基礎を形成する契機となっていることがうかがえます。（文責：松下幸司）

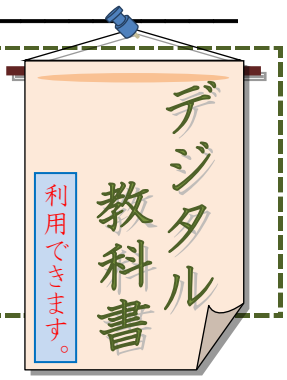
教育実践総合センター 活動報告（2013/10～2014/03）

2013 年 10 月 17 日（木）	第二回 研究プロジェクト①会合
10 月 19 日（土）	第一回 公開講演会
10 月 21 日（月）	第六回 専任会議
10 月 23 日（水）	教育実践演習全体指導
10 月 30 日（水）	教育実践集中講座（第二期１回目）
10 月 31 日（木）	第二回 研究プロジェクト②会合
11 月 ８日（金）	教育実践集中講座（第二期２回目）
11 月 15 日（金）	教育実践集中講座（第二期３回目）
11 月 20 日（水）	教育実践集中講座（第二期４回目）
11 月 22 日（金）	教育実践集中講座（第二期５回目）
11 月 25 日（月）	第七回 専任会議
11 月 28 日（木）	第三回 研究プロジェクト①会合
11 月 30 日（土）	第二回 公開講演会
12 月 ９日（月）	教育実践集中講座（第二期６回目） 第三回 編集会議
12 月 12 日（木）	教育実践集中講座（第二期７回目）
12 月 16 日（月）	第八回 専任会議 教育実践集中講座（第二期８回目）
12 月 19 日（木）	第三回 研究プロジェクト②会合
2014 年 １月 ７日（火）	第四回 編集会議
１月 20 日（月）	第九回 専任会議
２月 18 日（火）	第 84 回 国立大学教育実践研究関連センター協議会
２月 22 日（土）	第三回 公開講演会
２月 24 日（月）	第十回 専任会議
２月 27 日（木）	第 14 回 学部・附属学校園教員合同研究集会
３月 ６日（木）	第二回 管理委員会
３月 ７日（金）	第二回 企画推進委員会
３月 10 日（月）	第十一回 専任会議

寄贈図書（2013/10～2014/03）

島根大学　教育臨床総合研究　第 12 号	島根大学教育学部附属教育支援センター
岩手大学教育学部附属教育実践総合センター　研究紀要　12 号　2013	岩手大学教育学部附属教育実践総合センター
教育実践研究　第 39 号	金沢大学人間社会学域学校教育学類 附属教育実践支援センター
横浜国立大学大学院 教育学研究科 教育相談・支援総合センター研究論集 第 13 号 2013 年	国立大学法人 横浜国立大学
臨床相談研究　第 11 号　2013 年 12 月	東京家政大学附属 臨床相談センター
新学習指導要領シンポジウム　第３弾　論理的思考力・表現力育成のための カリキュラム開発　～教科間連携、幼・小・中連携を視野に入れて～	熊本大学教育学部
総合数理教育センター活動報告書－第 11 号－　平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月	名城大学
平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月　「フレンドシップ事業」実施報告書	山形大学地域教育文化学部
発達・臨床心理センター紀要　第 7 号　2012.3	甲子園大学発達・臨床心理センター
学生による授業満足度ベスト授業　教員による授業の工夫集	岐阜大学教養教育推進センター
教育推進・学生支援機構　教養教育推進部門広報誌　「ディアロゴス」　第 21 号	岐阜大学教育推進・学生支援機構 教養教育推進部門
平成１６年度　研究開発実施報告書（第３年次）	直島町立直島小学校・中学校
English Teaching Plan　2007	直島町立直島小学校
学校教育研究紀要　№28	鳴門教育大学 地域連携センター
2010～2013 年度　教員養成教育の評価等に関する調査研究　報告書	国立大学法人 東京学芸大学 教員養成評価プロジェクト
2010～2013 年度　教員養成教育の評価等に関する調査研究　報告書（資料編）	国立大学法人 東京学芸大学 教員養成評価プロジェクト
教育実践研究紀要　第 23 号	鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター
研究報告　第 39 巻　2014	香川県立五色台少年自然センター自然科学館
広島国際大学心理臨床センター紀要　第 12 号	広島国際大学心理臨床センター
ＪＳＥ　兵庫教育大学学校教育研究センター紀要　学校教育学研究　第 26 巻　2014 年	兵庫教育大学　学校教育研究センター
教育実践総合センター紀要　2014.3　第 13 号	長崎大学教育学部附属教育実践総合センター
研究紀要　第 41 巻	独立行政法人　国立特別支援教育総合研究所
HATO・教育環境支援プロジェクト　特別支援教育と専門相談における『行動支援』の 簡易逆引きマニュアル＆事例による効果的なアドバイス集	東京学芸大学教育実践研究支援センター
HATO・教育環境支援プロジェクト　学校「相談室」活用の実践ミニハンドブック	東京学芸大学教育実践研究支援センター
HATO・教育環境支援プロジェクト 特別支援教育における ICT 活用ミニハンドブック＜実践事例の紹介＞	東京学芸大学教育実践研究支援センター
教育実践総合センター　研究紀要　第 36 号　2013 年	山口大学教育学部附属教育実践総合センター
教育実践総合センター　研究紀要　第 37 号　2014 年	山口大学教育学部附属教育実践総合センター
教育実践研究　信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要　№１４	信州大学教育学部附属教育実践総合センター
平成 25 年度　E.FORUM　教育研究セミナー　成果報告書	京都大学大学院教育学研究科 教育実践コラボレーション・センター

【センターからのおしらせ】
本センターでは　これまで教員養成支援のため、香川県を中心に小中学校において使用されている教科書・指導書、教員養成・採用に関する書籍雑誌を整備してきました。これらと共に「デジタル教科書」や教材ソフトウェアの整備をすすめており、本学教育学部における教員養成の講義・演習等でも積極的に活用いただければと思っております。（デジタル教科書等ソフトウェアの種類によっては、ソフトウェアをインストールしたノートパソコンでの閲覧となります。）
現在、全国の小中学校に徐々に導入整備が進んでいる「デジタル教科書」。新しい教材の姿を、是非一度、ご覧いただければと思います。
（詳細は、実践センター事務室までお尋ねください。）



教育実践総合研究（第 29 号）原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第 29 号は、**5月 30 日（金）**原稿受付締切です。
以下投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究 投稿要領

１（投稿の要領）
香川大学教育実践総合研究（以下「教育実践総合研究」という。）への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。

２（投稿の内容）
教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料（研究ノート、研究動向の紹介など）及び香川大学教育学部附属教育実践総合センターの活動報告などを掲載する。

３（投稿者）
教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議（以下、「会議」という。）が特に依頼した者とする。

４（投稿原稿の提出方法）
投稿原稿は、完成原稿とし、原則としてワープロで作成し、ワープロ打ち出し原稿２部と、原稿を保存したフロッピーディスク等を会議に提出する。

５（投稿原稿の長さ）
投稿原稿の長さは、刷り上がり１４頁（１頁は２１字×４２行×２段）以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

６（刷り上がり１頁目の形式）
刷り上がり１頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属（所在地）、和文要旨（200 字）及びキーワード（５語）を含むものとする。

７（投稿原稿の取り扱い）
投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。
査読者については、会議において決定する。
（１）採　録
（２）条件つき採録
（３）返　戻

８（校　正）
校正は原則として３校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。
その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則
本要領は、平成１６年４月１日から適用する。
附則
本要領は、平成１７年１２月１４日から施行し、平成１７年１１月９日から適用する。
附則
本要領は、平成１９年４月１日から施行する。

香川大学で春さんぽ

香川大学教育学部附属教育実践総合センターニュース
（No. ３９）
発行日 平成２６年３月３１日
編集発行 香川大学教育学部附属教育実践総合センター　**代表者** 七條 正典
URL　http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/　E-mail jcen@ed.kagawa-u.ac.jp
〒760-8522　高松市幸町１－１　Tel. 087-832-1683　Fax. 087-832-1689